

した。その間、言語療法室での構音および摂食嚥下訓練は継続した。構音評価は、単音100語を用いた発語明瞭度検査を行い、全体の正答率および構音点別評価を言語療法室にて行った。ブローイングテストは、ソフトブローイングおよびハードブローイング時の鼻漏の程度について測定した。嚥下障害の評価としてはVFを行った。構音評価の正答率は、装置装着によって、28.3%→47%にまで改善。ブローイングテストでは、ソフト、ハード共に著大な改善がみられた。VF検査においても誤嚥は消失し、良好な結果が得られた。これらの結果から、脳梗塞後遺症などの後天性鼻咽腔閉鎖機能不全に対して、軟口蓋挙上装置を用いることによって各種機能の回復が得られるものと考えられた。しかし、その治療にあたっては、言語聴覚士などとの連携が必須で、場合によっては脳神経外科や耳鼻咽喉科医とも協力しあって治療にあたらなければならないものとする。

12) レジン系仮封材の辺縁封鎖性に関する研究

○山崎 隆史, 安達 仁, 菅島 正栄¹⁾

佐藤 暢昭, 齋藤 高弘

(奥羽大・歯・歯科保存, 口腔病態解析制御¹⁾)

(目的) 近年、間接修復法で作製されるインレーの暫間修復材としてレジン系仮封材が臨床で応用されており、使用される頻度が以前に比べて多くなってきている。しかしながら、その諸性質に関する詳細については多くは報告されていない。そこで本研究では新たに開発されたレジン系仮封材の封鎖性に注目し、色素浸透試験を行い検討したので報告する。

(材料および方法) 仮封材は、新たに開発されたレジン系仮封材として、化学重合型レジン系仮封材であるPLAST SEAL quick (日本歯科薬品) を、光重合型レジン系仮封材であるエバダイ (ネオ製薬) をそれぞれ用い、対照としては、ネオダイ $\cdot\alpha$ (ネオ製薬)、テンポラリーストッピング (GC)、Dura Seal (Reliance Co.) を使用した。これらの仮封材の辺縁封鎖性について色素浸透試験にて評価した。実験には、ホルマリン浸漬天然抜去歯を試料とした。歯冠部に、直径3mm、深さ2mmの円柱形の窩洞を形成し各種仮封材およ

び対照群を填塞後、24時間37°C水中保管した後、無条件群 (A群) と4°Cと60°Cの温度負荷試験を荷した条件群 (B群) の2群について、0.2%塩基性フクシン溶液に24時間浸漬後の色素浸透状態をスコープマンにて観察し評価を行った。浸透度は、色素浸透がみられないものを0、色素浸透がエナメル質内に限局しているものを1、色素浸透が象牙質に浸透しているものを2、色素浸透が窩底に及ぶものを3のように0~3の4段階にスコア化した。尚、各群の比較はMann-WhitneyのU検定を用いて、それぞれ危険率5%未満を有意差として統計処理を行った。

(結果および考察) テンポラリーストッピングに最も色素浸透が見られ、A群ではすべての材料と比較し有意差が認められたが、B群では、Dura Sealと有意差が認められなかった。良好な成績を示したネオダイ $\cdot\alpha$ と比較し、両条件下において新たに開発されたレジン系仮封材であるPLAST SEAL quick, エバダイは、有意差が認められなかった。以上のことから、PLAST SEAL quick, エバダイとも間接修復法における暫間修復材としての有用性が高いことが示唆された。

13) 歯質接着性修復材料を用いた支台築造と歯根の保全に関する研究

—ポスト材料の違いによる歯根破壊の様相の相違—

○菊井 徹哉, 安達 仁, 佐藤 暢昭, 齋藤 高弘

(奥羽大・歯・歯科保存)

(緒言) 高度の齶蝕歯ならびに破折歯の機能回復には根管保持型金属鑄造体による支台築造法が一般的であるが、金属は象牙質にくらべ弾性係数が大きく歯根破折を招く危険性が指摘されている。これを回避すべく近年繊維強化型プラスチック (FRP) を応用した築造法が考案された。本研究では歯根破折についてポスト材料の違いによる抗折強さと歯根破壊の様相を比較、検討した。

(材料・方法) ヒト歯は上顎中切歯および犬歯を用い、築造には象牙質接着性に優れるMega BONDとCleafil AP-Xの組み合わせ (以下CR) を、ポスト用材料には市販ステンレスポスト (以